

富士山 1707年 宝永噴火の体験談

前号に引き続き、富士山1707年宝永噴火につきまして掲載しますが、300年以上も前の災害のため、資料として残っている文献は僅かで、「今泉邑宝鑑」という史料から今泉村（現在の富士市）と近隣の被災時の様相を翻刻で紹介します。

五拾九番天変事六ヶ条

富士山御神火は宝永四丁亥年

十月九日より十六日迄国風強吹故二焼砂吹上候分ハ御表山二ハ少も不降候て北東へ吹拂候間當國駿東郡印野辺より須走がこ坂中山辺相州足柄山上郡二砂降りて江戸杯も昼茂曇候て暗よふなりよし足柄峠辺ハ砂壱丈余降積り候よし今以夥し

當村上之山三井五兵衛と申老人物語候は我等とも廿式才之年なり十月七日大地震二て村方家居多震倒し不及聞大地震也

然ル処同九日昼比富士山へ竿を立たることき雲立登りしまま不怪雲出しとおもひしが其雲次第にひろがり後ハ北東之空一面に曇其怪事二おもひ畑より皆へ召連れ帰りしが夜にいり怖敷音の響し故何やらんと門二出しが富士方真赤二なりし大地ゆさへせしまま裏二至りふしの方見る二一面二赤なり凄涼響して小家程なる火の玉空へ飛揚り世も滅するよふ覚宿二帰る二家ハゆさへゆれて倒るる斗りゆへに家内門の廣庭二畳をしきここ里居候故外二昼夜とも二居しが地震のことく大地動き怖敷事ハ誰今咄しより十倍せりと申せし也

又大宮中宿の実父被語候ハ七歳の時ゆへ二地震も寤不覚裏の廣庭二出し盤直し至て家内昼夜是二ありて家ハがら家なりしが地びりへと昼夜震ゆへ家の倒れん事を案んし家に入る事禁せしなり北空真赤にして間なく怖敷音響候時ハ世の中の滅し候やと聞来者多かりしが昔も富士かゝる事有深く葉ことかましく親達咄し申されしハ覚しなり

又大宮中宿叔母物語られしハ岩瀨出性也富士焼ハ十一の時なりしか十月七日大地しんせしが翌八日富士川干揚り鮎鰻等其外溜水にあるゆゑおひたしくとり候が三日水干て四日めより水押来れりと咄されぬ此水干候事ハ當國富士川西内房村内之白取山といへる山地震のため二山崩し

て富士川雪類落て堰留しなり右崩今ニあり岩瀨村之叔父事ハ右之大地震ニて家作倒れ裏ニ仮小屋建住せしが其仮家ニて出生せしとなり

一 明和六丑年同七寅年兩年共大早魃ニて諸作ハ勿論地薄の処は杉檜之類も枯て枯草ニ火を付候得ハ其根燃付て道半ハ昼夜焼候而二丁程ツツ道半分焼草深き處ハ道一面焼灰のことくなるなり

既ニ西山の原ニてハ牛焼土へ前の両あしを踏こミ悶へ苦ニて焼死ぬほとなり

若時のこと故兩年共ニ日数不覚寅年八月四日と覚候歟予四五人ニて暑凌がんとて涼居りしが夜五ツ半ニもある比北の方朱を染さしことく赤くなりしゆへ宮原むらニ出火あり呼立駈行家はつれより四五町走りて高き処ニ見ゆりぬれハ富士の後ろより空ハ朱のことくして次第ニ南方へひろがり来る故火雨こそ降ならんとて我逸ニ逃歸りしが怖敷ことハ限りなかりぬ赤色ハ次第ニひろがり空過ぬいかなる事と難弁事なり夜九ツ前ニ至り北方より赤空の中へ仮令^{するめ}鯛の鎗の形ち候て巾式尺斗りツツの白氣赤氣の至れる半空過まで不知立登りて半空白氣と赤氣との立縞のことくなりしが次第ニ薄くなりて夜八ツころ漸〜納りぬ

一 安永元辰年八月二日大風いなさ

同九日十七日戌亥大風両度吹倒重家雪いん三百六拾軒重家之分八十軒其余半潰家夥しく屋根残しハ一間ニても無之老人も無覚大風之趣申あへり

(注) 富士市教育委員会「今泉邑宝鑑」(562ページ～569ページ) から転載



富士山（赤線で囲まれた部分は、1707年の宝永噴火の跡）